

人類とエネルギー研究会編：

地球環境と人間

—環境の保全と成長の持続は可能か—

(財)省エネルギーセンター，1989年，1,400円

最近，地球規模での環境破壊，とくに大気汚染や大気異変の問題が国際的な問題になり，昨年も閣僚級の国際会議が開かれ，テレビ，新聞などマスコミでもこうした問題がようやく頻繁に取りあげられるようになった。しかし，一般の人々にとっては地球規模での環境破壊の問題は，日常の生活からは差し迫った問題としてなかなか実感されないように思われる。

地球規模での環境破壊の問題は，現象面での物理的・科学的解明の問題，人間の生産・消費活動の経済的問題，人間社会の発展（成長）を視野に入れた解決策を採る政治問題とが相互に絡み，まさに容易ならざる問題と化している。地理学を始め各研究分野では環境破壊の問題について書物・文献など多々目にすることが多いが，これら3つの問題を総合して多角的に捉えた書物は少ないように思う。

本書は，地球規模での環境破壊の問題を大気汚染・変質の問題を重点に，現象面での解明，経済活動（エネルギー消費の問題），政治課題（国際政治）の3つの分野での最近の動向を紹介し，環境問題での提言を行っている。一般向けの読み物であり，研究者向けの専門書ではないが，内容は図表，データなど専門的なものが含まれ，環境問題に関心をもつ人にも参考となろう。

執筆者は，前書きにも述べてあるように，1989年3月に「人類とエネルギー研究会」が開催した環境問題とこれに付随するエネルギー問題に関する講座での7人の講演者で，のちに内容をまとめ補筆したものである。

以下に各章の執筆者とタイトルと簡単な記述内容を掲げるが，執筆者はいずれも研究レベル，行政レベルでの環境問題，エネルギー問題で最前線で研究，実務に当たっている人々なので（実務の行政官ではなく，諮問機関の委員，外郭団体の研究員），生々しい情報やデータが盛り込まれている。

プロローグ —いままぜ地球環境問題なのか

生田豊朗(財)日本エネルギー経済研究所理事長：現在の環境問題の理解として，酸性雨，温室効果問題，対応迫られるエネルギー政策，これらの問題の困難さなど問題の所在を指摘。

第一話 —地球に異変が見えてきた

根元順吉（気象研究者，元中央气象台（現気象庁）予報官：近年の異常気象，海の異変（エルニーニョ現象），

全地球的な温度上昇（温室効果ガス），オゾン層破壊，文明との関わりの中の問題を気象学との関連で説明。

第二話 —地球温暖化を科学する

横山長之（公害資源研究所次長，気象学者で大気汚染の専門家）：地球規模で広がる汚染物質の問題，地球温暖化の機構と解明の現在の課題，温暖化への対策と現在の限界を紹介。

第三話 —森がなくなり魚が消える

大喜多敏一（桜美林大学教授。前国立公害研究所大気環境部長）：酸性雨，土壌汚染の問題と各国の対策を紹介。

第四話 —環境問題が世界をゆるがしはじめた。

茅陽一（東京大学教授，電子工学）：地球環境問題の長期的な流れ，国際的対応と協調の現状，温室効果の不確実性，温室効果への対策の可能性について言及。

第五話 —CO₂規制はどのような影響をもたらすか

湯浅俊昭（財)日本エネルギー経済研究所総合研究部）：エネルギーと地球環境問題，CO₂削減の地球的シナリオ，日本の電源選択への影響に論究。

エピローグ —成長の限界から持続する開発へ

田中紀夫（財)日本エネルギー経済研究所理事，(財)地球産業文化研究所地球環境対策部長）：膨張する人類の活動とエネルギー需給の問題，温暖化問題と国際会議の動向，今後の対応（日本が寄与できること）に言及。

各章の具体的な内容は省略するが，地球規模で進行する環境破壊，とくに大気汚染，温暖化，オゾン層の破壊の問題を現時点での科学技術，エネルギー経済，政治課題の多角的な問題として，各執筆者の考えがよくまとめられている。環境破壊の対応策については，執筆者も述べているように，決め手となる有効策は見いだされていない。それだけ地球規模の環境破壊を早期に解決するのは多くの困難な問題があることが認識させられる。

読後感として，通産省の外郭団体の研究所関係の執筆者が多いので，たとえば今世紀末までCO₂を20%削減するには原発増強を前提としていることには，異論もあろう。また温暖化に伴う海面上昇を海面膨張のみに帰した記述がみられ，専門的解釈に不足した点も見受けられるが，啓蒙の書として，また図表，巻末の環境問題に関する年表など資料としても参考になるので一読を薦めたい。個人がいま地球規模の環境問題でなし得ることは小さいが，個人がこうした問題を認識し，環境破壊防止への運動まで高めていくことが重要と思われる。

(大内 定，北海道教育大学札幌分校)